

西洋建築史第2回

古代1 - ギリシア・ローマの建築

中島 智章

序.『建築十書』のビルディングタイプ論

aedificatio= 公共建築(軍事+ 宗教+ 実用)+ 住宅建築 実用建築 港、フォルム、柱廊、浴場、劇場、遊歩廊

第1書:理論、都市、都市防御施設 第2書:建築の起源、構法と材料 第3書:神殿、イオニア式

第4書:コリント式、ドリス式、神殿 第5書:公共建築(フォルム、バジリカ、劇場、浴場、港)

第6書:私的建築(都市住宅、田園住宅)、理論 第7書:壁床天井仕上げ、絵画論、塗料

第8書:水利学(水源、水質、水道、井戸) 第9書:天文学、時計 第10書:建設機械、水利機械、武器、防御

1.古代ギリシアの建築

神殿建築 アクロポリス(神域)= 神殿建築複合体 木造建築に由来するといわれる円柱

古典(ヘレニック)期初期の神殿 太いドリス式円柱(正面の柱数が奇数の場合も パエストゥムのヘラ第1神殿)

古典(ヘレニック)期盛期の神殿 ドリス式(アテナイのパルテノン神殿)、イオニア式(アテナイのエレクトイオン)

ヘレニスティック期の神殿 コリント式の登場(アテナイのオリュンピエイオン)

神殿建築の語彙はウィトルウィウスの『建築十書』を通じて後世に伝わっている(一部はラテン語化されて)

神殿の平面形式: In antis, Prostylos, Amphiprostylos, Pteripteros, Pseudodipteros, Dipteros (露天式)

intercolumniation: Pycnostylos(3M), Systylos(4M), Diastylos(6M), Araeostylos, Eustylos(4.5M)

Stylobates 柱礎(base) 柱身(shaft) 柱頭(capital) Epistylion 中間帯 頂冠帯 Tympanon Acroterion

後世、柱上帯、中間帯、頂冠帯はarchitrave, frise, corniceと呼ばれ、まとめてentablatureと称する

劇場(orchestra, theatron, skeneから成る)、競技場(stadion)、体育场(gymnasion)

記念建築(ヘレニスティック期) 有力者の恵与指向 リュシクラテス記念堂= 競技に優勝した合唱隊指揮者

都市建築 アゴラ(広場)、ストア(柱廊) グリッド・プラン(ミレトス) 景観重視(プリエネ、ペルガモン)

2.古代ローマ建築の構法と円柱

ユリウス=クラウディウス朝(Augustus, Tiberius, Caligula, Claudius, Nero) BC27-AD68 * 元老院と皇帝親衛隊

サトゥルヌス神殿(国庫)、カストルとポッルークス神殿、南仏ニームのメゾン・カレ(ローマ神殿の正面性)

ウェスタ神殿(円形)、平和の祭壇、アウグストゥス帝のフォルム、マルケッルス劇場(ローマのドリス式)、オスティア港

69年の内乱(Galba, Otho, Vitellius) フラウィウス朝(Vespasianus, Titus, Domitianus) 69-96 * 中流出身の皇帝

ウェスパシアヌス帝のフラウィウス闘技場 テイトゥス帝治下に完成、テイトゥス凱旋門

五賢帝時代(Nerva, Trajanus, Hadrianus, Antoninus Pius, Marcus Aurelius Antoninus) 96-180 * 「連邦国家」

トラヤヌス帝のフォルムと市場、トラヤヌス記念柱、パンテオン、アントニヌス=ピウスとファウステーナ神殿

軸組構造ではなく壁構造(アーチ構法やコンクリート壁) 円柱は装飾と化す パンテオン(汎神殿) クーボラ

ウェスパシアヌス帝のフラウィウス闘技場(コロッセウム): ドリス式 イオニア式 コリント式 その亜種

都市住宅 中庭(Atrium, Peristylum)を中心として周りに部屋を ex)パンサの家(BC2世紀)などのポンペイの住宅群

ローマへ人口流入 インストラ(島)とよばれる集合住宅 『建築十書』第2書で少しだけ触れられている

パラティヌムの丘、ネロ帝のドムス・アウレア(Grotesque)、ハドリアヌス帝のヴィッラ(「建築家皇帝」お気に入りの場所を再現)

その他 風の塔(アテナイ)、ガール水道橋 Porta Maggiore セルウィウスの城壁とアウレリアヌスの城壁

アウグストゥス廟、ハドリアヌス廟(サンタンジェロ城) ディオクレティアヌス帝のスプリト離宮